

特集「東日本大震災後、外国人市民は何を感じ、どう行動したか？」

東日本大震災が発生した3月11日から1ヶ月の間に出国した外国人は約67万人、入国者は約36万人と発表されています(法務省入国管理局)。地震がない国で生まれ育った人や、日本に来て間もない時に今回の震災にあった人、多くの日本人とともに「帰宅難民」になった人など、被災地以外で暮らす外国人市民も、今回の震災ではさまざまな体験をし、一時帰国した人もしなかった人も、一様に不安や戸惑いを禁じえなかったようです。今回、**SIGNAL**では、(財)川崎市国際交流協会に係わりのある3名の外国人市民に取材し、東日本大震災後の気持ちの変化や行動について聞いてみました。

【質問事項】

- Q1** 地震の際どこで何をしていましたか？
- Q2** 地震のあと、自治体及び出身国大使館の対応はどうか？ 出身国に一時帰国したあと、どのタイミングで日本に戻りましたか？
- Q3** 何が役に立ちましたか？ 日常生活で防災への意識や備えが変わりましたか？
- Q4** 何が一番必要だと思われましたか？ 近くに住む日本人ができることは(してほしいことは)？



ホジェリオ・アンドラジ氏 (ブラジル出身、都内勤務、ボランティアでピエロ活動)

A1 最初の大きな揺れの時は、家で寝ていました。その時とつさに、横揺れより縦揺れの方が危険だと本で読んだことを思い出しました。2回目の地震(余震)は今まで経験したことのないような激しい揺れ方で、家具やテレビが倒れてびっくりしました。

A2 まずはテレビをつけました。分からない日本語もありましたが、日本政府のスピーディーな対応に、パニックや暴動も起こらず、ひとまず落ち着いたことがわかりました。そのあと、自国ブラジルのホームページで詳しいことを調べ、状況が理解出来ました。

「一時帰国」はしませんでした。私はチャンスがあっても「一時帰国」はしません。理由は2つあります。1つは外国人からすると、日本は憧れの国であり、ここにはチャンスもあるからです。そしてもう1つは、私にとって日本は第二の故郷だからです。初めて日本へ来た時、優しく受け入れていただきました。その国が一番苦しい時に、「ブラジルに帰ろう」とは考えられませんでした。

震災後すぐ、僕はピエロのボランティアで仙台へ行きました。高齢の方や障害を持った子ども達が居る場所でバルーンアートをしたところ、被災者の皆さんがとても喜んで下さいました。翌朝被災地で、ぬいぐるみと三輪車を見つけた時、「子どもがなくなったものなのか？」「持っていた子がいなくなってしまうのか？」と胸が詰まりました。それまで「今後のピエロの活動をどうしようか？」と迷っていましたが、その時「今こそピエロを続けて行こう。人を笑顔にしなければ。」と強く思いました。

A3 人に対する価値観が変わり、親や家族の事を大切に考えるようになりました。非常用バッグを用意しましたが、お金も必要だと思いました。

A4 日本はさまざまな災害対策が行われているので安心です。ただ、ご近所とのコミュニケーションは必要だと思いました。まだ日本語がよく分からないので、「大丈夫ですか？」といった言葉が交わせず、そういう意味の不安はありました。

(取材・文:編集ボランティア 伊東 都)



東日本大震災で被災された皆様にお見舞い申し上げます。
また、1日も早い復興をお祈りしております。



アレクサンドラ・小椋・クレメール氏 (フランス出身、語学講師)

A1 ひとりで自宅にいました。最初はともかく、だんだん揺れが強くなったので、外に出るべきか悩みました。その後、息子達を迎えに小学校と保育園へ行きました。小学生達は日頃の防災訓練のおかげで整然としていましたが、保護者の方がパニック状態でしたね。停電になったので寝るしかなかったのですが、なかなか寝付けませんでした。余震で怖がる息子達の気持ちを紛らわせたかったので、車に移って暖をとってDVDを見たり携帯電話を充電したりしました。

A2 地震や原発の情報は、テレビやフランス大使館のホームページで知りました。私はチェルノブイリ原発事故をフランスで経験したので、原発事故の怖さを知っていましたし、主人のすすめもあって、震災の次の日に大阪に移動し、そのまま家族でフランスへ帰国。私と息子達は4月の中旬に日本へ帰ってきました。

もちろん、色々な心配事はありましたが、私の生活基盤は今では日本にあります。こんな形で急に帰国するのは不本意ですし、現時点では何が本当かはわかりません。原発については、フランスでの関心も高く、多くの人が議論していました。国民性の違いで、日本では論じること自体を避ける傾向にあるようですが…。

A3 エリアメール(携帯電話の緊急速報配信サービス)は良いシステムだと思います。また、災害用伝言ダイヤル(171)は便利だと思うのですが、使い方がわからず、かえってストレスを感じました(笑)。非常持出用のリュックサックふたつ(パスポートなどの貴重品と、衣類や毛布など)を用意しました。

A4 長く日本で暮らしている外国人と、来日したばかりの外国人や一時的に滞在している外国人とでは、必要なものも度合いも違うと思います。日本語がわからない外国人が必要なことを聞ける体制があるといいと思います。また、情報をまとめた多言語パンフレットのようなものも有効かもしれませんね。

(取材・文:編集ボランティア 青柳尚子)

張東(チャンドン)氏 (中国・上海出身、中国語・水墨画講師)



A1 池袋で中国語のレッスンを終えて、2階の事務室でまとめの仕事をしていました。その日は自宅に帰れず、高田馬場の教室に歩いて行って泊まりました。自宅の家族とは全然連絡が取れませんでした。家族は無事でした。

A2 市役所からの連絡はありませんでした。私には中国大使館からの連絡はありませんでしたが、大使館は東北3県にバスを何台も用意して中国人を迎えに行ったり、中国への飛行機の増便をしました。

一時帰国を決めたのは3月15日でした。最初、私も妻も帰国するつもりは全くありませんでしたが、原発事故についての海外の報道を見て、とても心配した両親たちを安心させるために、とりあえず帰国することにしました。中国から見ると、福島第一原発と東京はすぐ隣に思えるのです。帰国を決めた時には、もう飛行機のチケットは取れなかったため、色々調べて3月18日に大阪港発のフェリーに乗り、20日に上海に着きました。

中国では、国内各地で検出された放射性物質の種類や数値が細かく報道されていました。放射性ヨウ素の摂取予防ができるという噂が流れ、震災直後「水の買い占め」ならぬ「塩の買い占め」が起こっていました。私は日本(関東地方)の実情がわかっていたし、中国語教室や会社を早く再開しなければと思っていたので、双方の両親を安心させて、4月8日に日本に戻りました。

A3 避難場所は確認していましたが、今回は、避難する必要は感じませんでした。震災後、飲料水を買って置かせてあります。

A4 防災バッグの用意は必要だと思いました。普段普通に使っている電気、ガス、水道のありがたさを実感しました。日本の役所には、外国人登録を元に調べて、来日1年以内の外国人市民に電話確認などをしてあげてほしい。彼らはまだ日本のことが良くわかってないので、このような震災時にはとても不安です。

(取材・文:編集ボランティア 小島俊彦)



(財)川崎市国際交流協会の災害情報対応について

(財)川崎市国際交流協会では、6月よりホームページにブログページ(<http://www.kian.or.jp/blog/kian/>)を作りました。災害時における緊急情報等を、7言語で適時提供していきます。

※7言語(英語、中国語、韓国・朝鮮語、タガログ語、スペイン語、ポルトガル語、やさしい日本語)

川崎市の外国人登録者数は、2011年6月末現在で31,794人となっています。

災害発生時、何が起きたのか、どうすればよいのか、どこに行けばどのような援助が受けられるか等、被災者に最も必要な情報を正しくわかりやすく伝えます。